

続いて北海道手をつなぐ育成会の佐藤 春光 会長よりご挨拶がありました。

始めにこの大会を成功させようと誰よりも楽しみにしておられた那須野前会長が、1月にお亡くなりになりました。障がいの重い人たちも参加出来るように願っていた那須野前会長の想いを添えて述べられました。「まだまだ差別や偏見が大きかった時代に、問題に気づき、これと取り組む使命感に燃えた人が中心になって、全国育成会が出来上がっていきました。育成会が産声をあげたとき、沢山の善意や英知が手をつなぎ合ったのです。全国的に育成会の会員減少や高齢化が言われていますが、何らかの生きづらさを持っている子どもたちは増えているのです。時代は、私たちが今一度育成会の原点に立ち返り、善意と英知の結集ができる会になることを求めているのだと思います。本大会がその一步となる事を願い、挨拶とします」と述べられました。

その後、全国手をつなぐ育成会連合会会長表彰では、東成区支部の「ふりーすぺーすSUN」藤原 鈴子 理事長が、受賞されました。心よりお祝い申し上げます。

全体会は、時間を押して始まり短い時間になりましたが、全国連合会の田中統括より「毎年、手をつなぐの注文冊子数が減少しているの、何とかして増やしていきたい。また、今年の10月から12月には、初めての試みとして、報酬改定と障害者総合支援法の見直しに向けて、障がいの垣根を越えて約40の福祉団体が、一致団結して国に対しての対応を図るそうです。会の存続の意義を考える時でもあり、障がいのある人の次世代に向けて今の活動を引きついでいただきたい、そして運動の理念でもある糸賀先生の言葉『この子らを世の光に』を実践していきましょう」と述べられました。

記念講演は、「地域・人権・ふつうの生活」と題し浅野 史郎 氏よりありました。浅野さんは、厚生省(当時)から北海道庁に出向していた時、「ケア付き住宅」を制度化し、北海道の障がい福祉を発展させた方です。

初めて重症心身障害施設(島田療育園)に見学に行かれた時には、車いすにも乗ることができず、床を這って移動している人が50人もおられ、ショックを受けて、「この子たちに生きている意味はあるのだろうか?」と思ってしまったそうです。しかし指導員さんの「昨日できなかったことが、今日できるようになる。今日できなかったことを、明日できるようにするのが、私たちの仕事です。」との言葉に、そんな進歩があれば、生きていてよかったと思う。その積み重ねが生き

ていくということだと感じられたそうです。

北海道での2年間は、とても素晴らしい方との出会いもあり、「太陽の園」生活寮(グループホームの前進)を手掛けられた佐藤 春男 施設長にはいろいろ教えて頂き、実際に生活寮で生活している人たちとも交流を持つことができ、施設等を実際に訪ね、話を聞いて回ることによって現状の確認ができたことはとてもよかったと語っておられました。

その後、「普通の生活は地域の中にある」という確信の下に浅野さんが、当時の厚生省の障害福祉課長の時に始めたのが、少人数で一緒に暮らすグループホーム制度でした。グループホームは選択肢のひとつで、グループホームは次への出発点だとおっしゃり、宮城県知事時代には、大規模施設に入所する知的障がいの地域移行を全国に先駆け進められました。

最後に「地域生活には、偏見をなくすることが大切。それには、地域に出ていき、障がいのある人を知らない人がいるなら、知ってもらいましょう。親の会一人一人が地域に働きかければ社会が変わりますよ」とおっしゃりご自身の経験を熱く、ユーモアたっぷりに交えて語って下さいました。親としての心構えを教えて頂いたような気がします。



全国大会に、参加するたびに感じることは、子どもたちの幸せを心より願う仲間が全国にいるということです。今回も共に過ごしたことで明日からも頑張ろうと進んでいくパワーを頂くことができました。大阪市育成会でも、皆さんにも感じて頂けるような育成会活動になりますよう、努力してまいりますのでよろしくお願い致します。

**第1分科会  
「発達・教育(子ども・家庭支援)」**

**難波支援学校支部 長谷川 美智代**

第1分科会では、「発達・教育」をテーマに、基調講演とシンポジウムが開催されました。

基調講演は、「児童虐待から～命の大切さを問う～」